

令和4年度第3回二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会 議事録要旨

日時 令和4年12月9日（金）13時30分～16時00分

場所 二宮町役場 第1委員会室

出席者 ○会員

出席 17名

原会長、山内副会長、大矢会員、八幡会員、渡邊会員、宮戸会員、小林会員、石井会員、齋藤会員、脇会員、中西会員、伊庭会員、野谷会員、岡野会員、杉本会員、藤原会員、森会員

欠席 1名

遠藤会員

○オブザーバー 3名（北川校長、藤田校長、和田校長）

○事務局 教育部長、教育委員会教育部教育総務課6名

傍聴者 2名

配布資料

- ・次第
- ・資料1 デンマークの教育と日本教育のこれから
- ・資料2 諸外国の教育事情
- ・資料3-① 第2回研究会・協議での各グループ「9年間で目指す子ども像」
キーワード分類表
- ・資料3-② 9年間でめざす子ども像と実現のための小中一貫した義務教育内容、
学校、家庭、地域の役割（案）

1 開会

2 会長あいさつ

会長：こんにちは。第2回の研究会では、本当に活発なご協議をいただきましてありがとうございました。後ほど、第2回の協議のまとめにつきましては、報告をさせていただきたいと思います。

本日は、これからを生きる、未来を生きる子供たちの教育を考えているこの研究会で、広い視野を持った視点で教育を考えたいということで、世界の教育事情を取り上げさせていただきました。講師のお二人をお招きしました。最初に、ニールセン北村朋子先生のお話をいただきます。北村先生は、現在デンマークにお住まいですが、ご実家が橘団地で、二宮を玄関口のようにして日本と世界で活躍していらっしゃるということで、藤原委員の紹介で、今日お願いすることになりました。それから、もう1人、本研究会の会員である渡邊恒文さんをお願いしています。世界各地の教育事情をご存知ということで、お話をいただくことになりました。本当にお二人のお話をとても楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

今日は、アンケート用紙をお配りしていますので、アンケートの項目に沿って皆さ

まからご意見をいただいて、今後に生かしていかれればと考えております。今日は書ききれない方は、QRコードからアクセスして、20日頃を目途に送っていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、講演会に入ります。北村先生よろしくお願いいたします。

3 協議

(1) 世界の教育事情

① ニールセン北村朋子氏

講演「デンマークの教育と日本の教育のこれから」

北村氏：今日は、小さい頃から生活圏であった二宮で、こうして皆さんと教育の未来について考えられるという機会をいただき、本当に嬉しく、有難く思っています。では早速、お話に入りたいと思います。

まず、自己紹介ですが、小学校2年からずっと橘団地で過ごしていましたが、2001年からデンマークに住んでおります。沖縄本島ぐらいの大きさの「ロラン島」という人口約6万人の島で暮らしています。普段は文化翻訳家として、デンマークと日本を結ぶ、ありとあらゆる仕事をしています。直近の仕事では、先月にNHKの取材があり、おはよう日本やニュースウォッチ9、BSの報道特集などで放送されるそうです。今回は、再生可能エネルギーについての取材を受けました。本当にいろいろな方とお会いする仕事で、ある日は、皇室や王室の方との仕事であったり、幼稚園の子供たちとワークショップであったり、本当にいろいろな年齢層、バックグラウンドの人とお話ができ、お仕事をさせていただいています。

教育という点で言えば、デンマークには「フォルケホイスコーレ」という、デンマーク発祥の大人の人生の学校と言われているものがあります。これは、近代デンマークの基盤になったと言っても過言ではない教育機関ですが、それをロラン島にも創るということで、2016年から理事として立ち上げに関わってきました。おかげさまで、来年の8月に開校予定で、今、ラストスパートをしている状況です。

あとは、私には息子が1人おり、ちょうど先月20歳になりました。この夏、高校卒業したところで、デンマークの教育をずっと受けてきています。そういう点で、母親としても、デンマークの教育と自分が日本で受けていた教育を比較ができるという立場にもおります。また、私自身もほぼ全部の保育所から幼稚園、それから大学、大学大学院といったところまで取材に行っておりますので、そういったお話を皆さんと共有できればと思っています。あとは、日本で「AIDA DESINE LAB」という一般社団法人の理事もやっています。

デンマークについて皆さんあんまりご存知ないかもしれないので、簡単に比較で用意しました。日本に比べたら本当に小さな国です。大きさは九州ほどで、人口は約584万人です。ただ、デンマークは自治領として、フェロー諸島とグリーンランドを持っているので、グリーンランドを入れると相当大きな国になります。グリーンランドもフェロー諸島もどちらにも行きましたが、どちらも非常にいいところですので、皆様にも是非、デンマークも含めて来ていただきたいと思います。

これだけ小さな国ではありますが、1人当たりのGDPで見ますと、非常に効率よく稼いでいる国だと言えます。今、世界第9位で、何でそんなに儲けているのかというと、まずは、豚肉です。日本にもたくさんのデンマークの豚肉が入ってきています。日本の豚肉市場の約12%はデンマーク産と言われています。それから世界シェアのトップである医薬品、特に糖尿病関係、インシュリン等もたくさん日本に入ってきています。それから、再生可能エネルギーでは、風力発電機や再生可能エネルギーを使ったソリューションなども日本に多く入ってきています。逆に自動車メーカーがないため、車はたくさん日本から入ってきていますし、高額機器や建設機械とかは、日本のものが非常に好まれて使われています。デンマークというによく聞くのが世界幸福度ランキングではないかと思えます。どんな国なのか分かっていただくため、ランキング上位のものをいくつかご紹介します。世界幸福度ランキングでは現在2位です。ちなみに日本は54位になっています。それから、腐敗認識指数ランキングでは、デンマークは1位をずっととり続けており、非常に腐敗に厳しい国です。日本は18位になっています。民主主義という言葉が幼稚園から聞かれるぐらい、非常に民主主義に重きを置いている国で、現在第6位です。大体1位から5位前後に位置することが多いですが、民主主義は非常に重要な価値観の一つになっています。それから、世界報道自由度ランキングは世界第2位です。非常に透明度の高い報道で、ジャーナリズムの重要性を非常に強く認識しています。ジャーナリズムは、民主主義の第4の権力であると言われており、三権分立がまずあって、それを監視するもう一つの民主主義を支える視点がジャーナリズムだと強く意識している国です。それから、SDGs達成度ランキングに関しても2位で、比較的1位から3位に位置しているような状況です。先ほど豚肉が大きな産業の一つと申し上げましたが、実は、デンマークは今、肉を食べる量を減らすことについて、SDGsのため国を挙げて取り組もうとしています。将来的には、徐々にプラントベースのタンパク質に移していき、肉を食べる量を先進国が減らしていくことで、タンパク質が行き渡らない途上国にも、その栄養価を届け、水、二酸化炭素の排出量などの不均衡が減らせるように、主要産業のあり方さえも変えていくことを熱心にやろうとしています。2030年を転機に、大きく変わっていくと思うので、ぜひ皆さんもデンマークの今後の産業食のあり方については、注目し続けていただければと思います。

ジェンダーギャップ指数については、あまり成績良くないですが、あえて挙げています。日本でも非常に問題として取り上げられることが多いと思いますが、デンマークも非常に低いランキングです。これはなぜかということ、国会議員とか官僚は、女性もかなり多くなって43%ぐらいですが、経営者、経営トップというポジションでまだまだ女性が少ないことからこういう評価になっているようです。

デンマークについては、おそらく高福祉高負担、ゆりかごから墓場までといことを皆さんご存知じゃないかと思えます。医療費や介護費などが無料で、年金もすべての人に行き渡ります。子育て支援も非常に充実していますし、教育は、基本的に義務教育から大学、大学院までは無料ということになっています。自分の生まれた環

境や背景に左右されない選択肢が得られるという点では、非常にすぐれた仕組みなのではないかと感じています。よく日本だと最終学歴を書くことが多いですが、デンマークでは、最近では最新学歴を聞かれます。何を今勉強しているか、何に関心があるか。やはり、子どもが一番新しい学びを受け続けているので、大人こそがアップデートしなければならないというところが、大人の責任として非常に大きく問われます。大人になればなるほど、何を最近学んでいるかが大きなテーマになることが多いです。

こういった社会福祉制度を支えているのはもちろん税金ですので、私たちは本当に高い税金を払っています。個人所得税率も56%程度で、消費税も軽減税率なしのすべて25%です。何を買っても非常に高いです。車は、新車だと税金が180%もかかって、その上にさらに25%の消費税がかかるので、新車を買うのは大変です。日本で買う倍以上の金額になります。その代わりに、小さい国なので、法人税は若干低く抑えられていて、EU内や世界での競争力を保っています。

デンマーク人は、世界で一番幸せな国民ということで、何回か選ばれています。デンマークの幸福研究所が、2014年に調査した結果、デンマーク人が幸せに感じている理由を8つ挙げています。デンマークは、いまだに性善説で社会が成り立っており、今でも子供には、わからなかったら周りの人に聞きなさいと教えています。あとは、安全です。国民の不安がとにかく少ない状況にするとということです。国の予算規模も小さいですから、人を監視したり、疑ったりするところを使うのではなく、できる限りその人を信頼できる社会を作る。その安全性を保つことで、そこにかかるリスクヘッジのためのコストを減らすことも重要視されています。それから所得はかなり多いです。先ほどの1人当たりのGDPが6万ドルというのが、デンマークの平均的な年収に近い金額になってくると思います。得た給与を何に使うかは非常に大事なことで、特に、起業して成功した人は、何らかの形で社会に還元するのが慣例化していますし、給与が少ない人であっても、社会に貢献するためのボランティア活動を非常に盛んに行っています。それから、自分の人生を自分で決められる「自由」。当たり前のことのようでもなかなかできないことも多いかと思いません。でも、デンマークではほぼできている国であると私も感じています。それから、仕事が人生のすべてではなく、自分のアイデンティティの表現、社会との繋がりはもちろん、バランスよくやることで、自分の幸福度も上がっていくと認識しています。それからさきほどの民主主義も非常に重要です。11月1日に国政選挙があり投票率84.3%でしたが、この30年で一番低かったです。85%を切ることは、大きな話題になるくらい、投票率が非常に高い国です。政治参加の意識は非常に高い国だと思います。ちなみに、その選挙では中道左派が勝ちましたが、いまだに組閣はできておりません。大体デンマークの場合は中道左派、中道右派のどちらかが政権を握るということが8年おきぐらいで交代して続いているのですが、今回はいろんな世界の情勢が複雑になってきているので、その中道をできるだけ目指した大連立をやってみようという新たな取り組みをしようとしている。今までにやったことがないことなので、非常に大きな議論になっていて、まだ組閣ができない。それぐらい話

し合いを慎重にやっている状況です。日本だと考えられないと思いますが、そのようなことも起こり得る国です。それから市民社会です。さっき言ったようにボランティアや社会に参加することもアイデンティティとしては非常に重要になっています。それからバランスの良さもあります。例えば、職場での働き方のバランスでは、11時間ルールがあり、夜遅くまで仕事したら、そのあと11時間空けないと仕事ができないという法律になっているとか、週37時間労働が基本で残業もなく働いています。年の有給休暇は、大体5週間から6週間で、皆さんがきっちり休暇を取得できるようにして、限りなく週の労働時間を30時間に近づけるような動きもあります。デンマークだけではなく、スウェーデン、ノルウェーも同様に目指していますが、その優先順位をどうつけるかを考えるうえで、どうやって仕事と生活、それから人生全体のバランスを作り、また社会のバランスを作っていくのかについて、今、再定義の段階にきているように感じます。

デンマークの教育システムは、義務教育は0年生から9年生まで10年間で、その前に大体3年間ほど幼稚園に行く感じです。デンマークの幼稚園は、保育園と幼稚園を兼ねているような感じで、基本的に朝6時半から夕方の16時まで預かっています。義務教育を9年生終わると10年生も選択できることになっていて、今は半分ぐらいの人が選んでいます。また、10年生は「エフタスコーレ」という全寮制の学校に1年入ることもできます。そのあとの高校はビジネス系、エンジニアリング系、職業の専門の学校、普通高校などに分かれていきます。その先の大学、大学院があって、以外の選択肢として、17歳半以上になると「フォルケホイスコーレ」という選択肢もあり、大体、半年とか1年間通う人が多いです。それから、会社に入ったりしても、成人教育、生涯教育は毎年繰り返されていきます。私の友人の会社では、日本円で40万円くらいの自己啓発費が出ており、自分で好きなセミナーに参加したり、書籍を購入したりということに充てられます。デンマークの教育の面白いところは、待機児童が基本的にいないことです。これは、自治体の義務で、必ず受け入れる体制を作らなければならないとなっています。やはり自治体にとっては、税収が非常に大きな意味を持ちますので、働ける人にはとにかく働いてもらうことで、子どもが預けられないから働けないような状況を作らないことが、大事な部分になっています。あと、デンマークにも森の幼稚園があって、うちの息子も森の幼稚園に行きました。実際に、私も森の幼稚園の立ち上げに携わりましたが非常に自然保育が盛んです。毎日何して遊ぶかは子どもが決めます。年間を通して、こういうテーマで、例えば、9月や10月であったら、ハンティングや収穫のシーズンの時は、「収穫」というテーマを決め、農家の人と一緒に作業をしたり、ハンターの人と鹿や野ウサギなどを一緒に捌いて食べるようなこともしますけども、毎日の遊びは子どもたちが自分で決めています。その中で、子どもたちも、みんな気分が違ったりもするので、どうやって遊ぶとできるだけみんなが気分よく遊べ、自分が遊びたいように遊べるかを毎日考えながらやっています。うちの息子は、森の幼稚園に行って遊ぶときに、自分は幼稚園児ではあるけれども、ある程度の責任を持って遊んでいた気がするっていう話をしていました。例えば森の幼稚園で遊ぶと、大人から

ちょっと見にくいところで木登りとかするわけです。木登りしていると何回かに1回落ちたりする。大体友達と一緒に遊んでいるので、3人ぐらいで遊んでいて1人落ちたら、1人は落ちた子を見ておいて、もう1人は先生を呼びに行くとか、何か起こったときにどう行動するかは、子どもの中でも暗黙の了解で決まっていく。それをどうやったら素早くできるかは、常に誰にも言われなかったけど、考えながら遊んでいたと話をしていました。そういったことは多分、昔の日本の子どももやっていたと思いますし、今もやっている子どももいるかもしれないけど、自分で決める、それに伴う責任も負うことは、デンマークでは普通のことです。幼稚園では読み書きは教えません。先生は、見守るのが一番の仕事で、喧嘩になっても、声かけはしません。しばらく様子を見て、大体子どもたち同士で解決するので、そのサポートにあたることが多いです。このように自分たちでいろんなことを決めることで、いろんな意見があり、遊びたくない子どもや、日によってすごく気分が変わる子がいるなど、自然も毎日同じではないことも学んでいきます。小中学校は、デンマークは一貫校です。フォルケホイスコーレという名前ですけれども、0年生から9年生までの10年間は義務教育になっています。基本的に給食はなく、成績表も7年生ぐらいまでは出しません。試験も全国での学力を図るために、共通のテストみたいなものをやるようになってきていますが、年に1回ぐらいです。基本的には最後の卒業試験が一番大事で、その準備を8年生からやるので、試験はほとんどないです。宿題もあまりないです。あとは、小中学校の生徒会と親のPTAみたいな組織と、学校とか自治体の組織がそれぞれあって、その三者で学校内の物事を決めたり、その自治体の中での、学校の予算配分の優先順位とかも子どもと一緒に話し合っただけで決めます。例えば、各校から生徒代表が出て、「うちの学校は体育館が非常に老朽化しているから、早くこれを何とかして欲しい」というような意見が出た場合は、他の学校の生徒も一緒に見に行きます。確かにこれはうちの学校より酷いと情報が共有できたら、うちの学校は1年待ってもいいからこっちの学校に先にやらしてもらおうというように子ども同士でも話し合っただけで決めることをやっています。決定権は子どもも親も、先生、もしくは自治体も同じように持っていますから、三者の話し合いでいろんなことが決まっていきます。

デンマークの義務教育の特徴としては、教科別に特化して、その教科別に担任がいます。教科別に先生が1年生から分かれていますし、あとは複数教科組み合わせという授業も非常に多いです。体育とか英語と数学とか、国語と英語を組み合わせる時もありますし、様々な教科が組み合わせられて授業が進められます。それから民主主義社会で、自分も人もどう生かすかが非常に大事なテーマになっているので、とにかく、義務教育の間はコミュニケーションを実験する場だから、失敗はないことをよく話しています。それから、生徒一人一人のニーズに合わせた教育で、0年生からITを駆使しており、例えば、1クラス22人から24人ぐらいの中で、生徒がみんな同じことをやるのではなくて、それぞれの進捗度合いに合わせた内容のテーマに取り組むことも非常に多いです。グループワークの時は、グループで一つのテーマに取り組みます。大きなテーマは、全体で学生が話し合っただけで、それぞれ

のチームのテーマは、それぞれで決めることも多いです。社会に出るとチームで仕事をすることがほとんどで、社会に出たときのことを想定すると、自分の好きな人同士で組むことはありえないです。自分と意見が合わない人ともやらないといけなことは多々あるので、そのときに、どうやって、それでも最大限お互い機嫌よくやるかという道を模索することも小学校からどんどん練習をしていきます。

デンマークの義務教育のゴールは、すべての生徒の最大の可能性を引き出すこと。それから、冒頭にも言いましたけれども、生徒の社会的背景に学業成績が左右されないこと。それから、学校への信頼と生徒の幸せということです。生徒、それからそこに携わる教員、そこで働く人たちの幸せなくして、良い教育はありえないということが前提になっているのです。いかに、教育を受け取っていく側、自分で学んでいく側、それからそれをサポートする側が、幸せであるか。それぞれの人格、人権が尊重されるのかも非常に重視されています。これは、中学校の模擬選挙の様子ですが、地方自治選挙があると必ず地域の学校でも同じように選挙をして、立候補者も中学校に必ず来ます。討論会をやって、その中で大人と同じように選挙をして、大人が出した結果と子供が出した結果がどう違うか、どう同じかということをし合います。ですので、選挙が、選挙権を持つ前から身近な存在です。これは、昨年の11月にあった高校の選挙の時の討論会の様子です。学生が集まって、候補者も出席をして、いろいろなテーマについて討論していきます。昨年の選挙のテーマでは、特に気候変動適応についての質問が非常に多かったです。「自分たちの世代が一番背負っていくのに対し、私たちの不安や負担を減らすために、今、何をやろうとしていますか。」という質問が非常に多かったです。それから、教育やジェンダーについての質問も多いです。今、いろいろなジェンダーの生きづらさを抱えている子どもたちもたくさんいますが、もっと性教育の幅を広げたらどうかというような提案も多く学生から出ていました。10年生を選ぶ生徒が増えているのが資料からわかると思います。エフタスコーレは全寮制の学校で、うちの息子も行きましたがとても自立しました。1年で本当に効果が実感できる教育機関なので、二宮にも是非創ってもらいたいなと思います。エフタスコーレは、フォルケホイスコーレと似ていますが、必修科目、中学校での勉強以外にも、スポーツとか芸術とか選択科目がいろいろあり、自分の興味に沿ったものを必ず選択できるようになっています。例えば、サッカー選手、ミュージシャンになりたいと考えている場合、エフタスコーレに行くと、プロやプロの世界に近い人が教えてくれ、また全国から興味がある子どもたちが集まるので、自分の今の立ち位置や、自分が思い描いている未来、職業などを俯瞰することができます。そうした経験を通じ、自分の職業にすべきか、趣味のままにするのかなどを見極めたりできます。小中学校はその地域の文化とか、家庭の文化とかが非常に大きく影響して、そこでうまくいかないともう世界でうまくいかないみたいな錯覚に陥ってしまうこともあると思います。エフタスコーレやフォルケホイスコーレのような所は、全く違うところからみんなが集まってくるので、自分の町での文化や家庭文化から距離を置いて、1人の人間として、自分の考えや相手の考えを改めて考えることができます。これは非常に大きなメリットがあると思います。日常から脱却する機会は、人生の中で何度か必要だと思いますがな

かなか難しい。ですから、大手を振ってできるこの1年間は、ミドルティーンにとって非常に大きな経験になっていると思います。うちの息子のエフタスコーレのエピソードに、非常に面白いアクティビティがあります。ある秋の日に、暖かい服とスナックのような簡単に食べられるものを持って夜10時に駐車場に集まりなさいと言われて集まると、そこから先生から目隠しをして車に乗せられて、グループごとに20分から30分の距離まで運ばれ、各グループ違う森の中で降ろされます。降ろされたところから歩いて帰るとというのがテーマです。携帯のGPSも限られた条件で使うことはできますが、できるだけ人に聞くとか、自分たちの感覚を働かせる学校に何とか戻ります。うちの息子たちのケースでは、途中ちょっと疲れて野原で寝て、みんなの健康状態も気づかいながら、13時間ほどかかって、次の日のお昼ぐらいに戻ってきてました。歩いた距離も56キロで、途中、警察官に職務質問をされたりするなど、普段できない経験をたくさんしました。デンマークには、社会人になっても教育を受ける権利があるという話をしましたけれども、大体年間2週間ぐらいはそういった時間に充てている人が多いです。失業中ももちろん受けられますし、それに参加する費用も自己負担ではないところが多いです。子ども教育省の省庁のホームページの教育ガイドのページでは、ありとあらゆる教育について調べることができるようになっています。若い人向けの教育機関、それから、もう少し勉強したい人向け、例えば大学院とか、ビジネススクールとか、あとは、就職している人のスキルアップなども、ここで全てを調べることができます。特に就職している人に関しては、特別にAMUというページがあり、それぞれの職業の機能をより深めることができるコースがたくさん用意されています。建築業界、サービス業界、生産業界、IT業界などいろいろあると思いますが、そういった人たち向けのコースが、何千と用意されています。よくデンマークに視察に来られる方が、会社が教育費を負担して、いろいろ教育させても転職されてしまうと損ではないかという質問をされることがあります。大体の企業では、教育の機会を与えた人が転職しても、どの雇用現場でも同じように教育を行えば、すぐれた人材が労働市場に増えることに繋がるからウィンウィンであるという考え方を持っています。常にアップデートされた人材が、市場に溢れているところを目指しているのです。あと、フォルケホイスコーレは人生の学校で17歳半以上なら誰でも入学できます。試験とか成績とか評価もないですし、卒業証書や資格がもらえるわけでもない学校です。全寮制で、ここに行く理由は、自分と向き合う時間を持つということです。日常から脱却するということ。自分を知って自分の強みを社会で生かす術を学ぶというところで、フォルケホイスコーレは何でもありなので、誰からも評価されない時間を堪能できます。ほとんどの人は誰かから必ず評価される人生を送っているのではないかと思います。デンマークの場合はそういったギャップイヤーをとることも多くて、誰からの批判や評価もされない時間を何回か取ることで、自分をニュートラルに戻していくという重要性は、非常に意識されています。フォルケホイスコーレが生まれた背景としては、デンマークは、周りの国に影響を受けて、戦争に加担させられ、特にこのナポレオン戦争で大きな痛手を負って、国家財政が破綻するという経験をしています。大きな北海帝国だった国がどんどん小さくなる経験をしたので、この民族

主義が生まれて、この残った人の民度を上げていかにその国として立て直していくかが重要視されていきました。詩人のハンス・ホルストが「外に失いしものを内にて取り戻さん」ということで、外に目を向けるのではなくて、自分たちのあり方を見直そうというところから、フォルケホイスコーレが生まれました。この生まれたきっかけになったのが、グルントヴィという人です。この近代デンマークの父とも言われている人は、非常にマルチタレントで、多彩な人でした。1844年に初めてフォルケホイスコーレが作られた頃は、西側から民主主義の波が押し寄せてきており、もう絶対王政では無理だということで、民主主義に変わっていくのであれば、農民たちの再教育の機会を含め、たくさんの意見を取り入れて、新しい社会を作る基盤を構築するためフォルケホイスコーレができました。結局5年後の1849年に、デンマーク初めての民主主義憲法を作り民主化しました。この時にグルントヴィの弟子だったクリステン・コルという教師がいましたが、この人は自分の経験上、教科書を読ませて、板書させて教えるよりも、教科書を自分が読み込んでそれをストーリーとして子どもたちに話した方が、非常に飲み込みが早いということに気づいていました。当時は異端だったので、非常に弾圧も受けてたけれども、彼は細々と生徒の支持を得ながら先生体制という上下関係ではなくて、対等に対話しながら学んでいくという手法をここで確立していきます。この当時は異端だったけれども、今ではデンマークの教育方法のスタンダードになっており、クリステン・コルがチャレンジした教育方法は、デンマークの今の教育にも大きな意味を持っています。フォルケホイスコーレは、現在、75施設ほどデンマークにあります。本当に音楽、芸術、スポーツ、デザイン、ジャーナリズムなどいろいろなものを扱っている学校です。年間に1万人ぐらいの人が参加しています。基本的には、民主主義を啓蒙するための学校ですので、これをテーマにしていれば、教え方は、何を通して教えるのでも構わなく、国は、運営費の半分を助成金として出してくれます。フォルケホイスコーレ法があるので、それに基づいて出してくれるけど、内容に関しては口を出さないという、非常に良いシステムです。デンマークの教育のすぐれている点を洗い出してみたので、皆さんにお話したいと思います。まず子どもが子どもでいられる時間、若者が若者でいられる時間を最大限尊重して、大人の都合でその貴重な時間を搾取しない教育と社会の仕組みが、確立されているのも素晴らしいと私は思っています。夏に高校を卒業した自分の子どもとクラスメイトと話した時には、それぞれ家庭の事情やコロナもありましたけれども、「自分たちがやりたいことはこれまで概ねできてきたよね。」という話をしていました。逆に私は日本の学生と授業やワークショップで関わることがありますが、自分がやりたいことがわからないとか、あるけど本音を言えないとか、どうやったらたどり着けるのかわからないなどで悩んでいる子がたくさんいます。ですから、大人が良かれとやっているものが実は邪魔なんじゃないかとも思うようになりました。やりたいことが実現できているということは、やっぱりすごいことだと改めて感じています。あとは、人を否定しないです。人のことをやたら怒ったり、ジャッジをしたりもしないです。怒りではなく、興味と関心を持ってじっくりとした対話でもつれをほぐしていく。あとは、本音を言い合える、信頼のおける人間関係と環境、それから人間

らしい暮らし、例えば、睡眠時間、親子で対話する時間、友達同士で存分に遊ぶ時間があるという当たり前の暮らしがちゃんとできているということ。それから考える時間を持つ生活と学びの環境。ちゃんと考えなきゃいけないときは考えられる時間があるかどうか。なかなか、日本ではなくなっているような気がします。それから義務教育から大学院まで無料であるということ。エフタスコーレとそのミドルティーンのギャップイヤーがあること。それから、18歳から学生に支給される給付型の奨学金があるということ。ギャップイヤーが全体に渡って普及していること。一人一人の成長やスピードや特性を尊重した学び。それから、順位とか成績至上主義ではない学びと仕事、それから学びと仕事が直結していること。誰もが居場所が持つこと。それから、休みをちゃんと取っているということです。あと、国定教科書がなくて、先生と子どもでどういう学びを作り上げていくかを非常に重要視されているということ。それから正解が一つではないということです。よくアーチェリーの的で例えられますが、日本の教育だと、中心の赤丸に当たった時が正解で、それ以外は不正解。でも、アーチェリーの的ではちょっと外れたところでも得点にはなります。それはいろいろな正解があって、今の時点ではこの赤丸が正解と捉えられているけれども、5年後には端っこ部分が正解になっているかもしれない。なので、その赤丸だけが正解だと言って、この外側が正解だと感じる子どもたちの感性を切り捨ててはいけません。ここが正解かもしれないともう1度考えてみるイノベーションの種を全部なくしてしまうことになるので、赤丸だけが正解だと考えるのは危険だと民主的に考えているということです。それから、先生のアップグレード資格もあり、先生同士で教えたりとか、アドバイスをしたりする教育制度があるので、先生も学びの機会がたくさんあります。あと、教育は投資であってコストではないというところも、はっきり認識しています。それから、地域全体が学びの場で、地域や社会全体で子どもを育てようとするという、みんなが本当におせっかいです。デンマークの人はおせっかいで、たくさんのおせっかいがあるからこそ、それがセーフティーネットになっていて、既存のあり方からこぼれそうになる子どもも、その人たちが支えたりとか、支えるきっかけになったりすることがたくさんあります。あとは自尊心と自立心、自己肯定感を高めるための学び。自尊心は、非常に大事だと思います。誰からか褒めてもらわないと自信がつかないですけれども、自尊心は誰かが褒めてくれなくても、自分は、自分が存在していることの尊さを意識できるので、それを育てることが非常に重要で、そこに力を入れています。それから生きた学び、リアルタイムの学び。世界での動きが早いですから、世界で今日起こっていることをそのまま授業にすることも非常に多いです。あとは、学生が選べる学び。例えば英語はどういうテーマで学びたいとか、長い歴史の中でどの分野を深掘りしたいかは子どもたちが決めて学んでいきます。それから、世の中はレゴのようなものだからみんなが平均点的にできなくてもいいという考え方も普及しています。ですから、英語が得意とか、数学得意とかあればあるほど、でこぼこがはっきりするので、レゴみたいに重なって、いろんな組み合わせができる。そうするといろんな組み合わせによって、そこからイノベーションが生まれると考えています。それから幸せ第一主義で、幸せになるため行うことを後回しにはしてはいけ

ない。でも、我慢をしないとたどり着けないのではなくて、ちゃんと今が幸せであることを大事にすること。それから、国の目指す方向性と教育内容が一致していることです。国が目指す方向性をはっきりとデンマークは出しているのです、それに基づいて必要な教育が細分化されて、実際に行われています。それから、宗教、政治、性教育と正面から向き合うということ。これも小さいときから子どもは、大人と真正面からぶつかり合って学んでいきます。あとは、その子の生涯を長い目で見るといことです。子どもに関わるのは学校にいる数年間かもしれないけど、この子が生涯、どういうふうに育っていくと一番良いのかを周りで関わる人が、その全体像を共有しながら関わっていくということ。それから、多様な人や考え方の違いとたくさん出会うことで、それを否定しないこと、受入れること。自分も他の人から見たら、意外な考え方をする人かもしれないいろいろな立場を知るといこと。それから、物事や人生を俯瞰で見る練習をすること。自分の立場で見たらこうだけど、人の立場で見たらこういいうふうに見えているとか、長い目で見るとこんな様な出来事の一部かもしれないとか、学校は、多様な人や考え方や仕組みの中で、どうやってコミュニケーションをとりながらコンセンサスをとって、より良く生きることができて、かつ、自分たちの次の世代にも持続可能なやり方を見いだすことができるのかを学ぶ場なので、今も未来も幸せじゃないといけないから、それをどうやって見つけていくか。今までにやったことないことを試していけないといけないから、失敗しても問題ないし、失敗できる余白もたくさんあるといこと。それから、競い争うの競争ではなくてともに創る方の共創であるといこと。これは学校でも仕事でもデンマークは同じです。競争というのは、基本的にはないです。ライバル会社との競争はあると思いますが、社員同士でライバルになることはあんまりないです。ともに創っていくといところなんです。それから人生の長さ一人一人違うので、あなたはこういうふうに生きなさいと決められないです。だから自分の感覚を大事にして、自分のペースできることを尊重することも非常に大事です。それから、ペダゴという教育支援員がいますが、人の育ちを専門に見る人、それから教科を専門に見る人、その2人が共同して1人の生徒を育てていくので、人の育ちの部分のケアもあるといことも非常に良いところだと思います。日本の仕組みで疑問に思ふこともちょっとあげてみました。校則、試験、制服は何のためにあるのか。人事異動って何でやるか、本当に必要なのでしょうか。あと、子どもの権利はどこにあるのか、何の権利があって大人や制度が子どもや若者の時間を奪っているのか。国が子ども全員に教育を施す義務があり、そのために学校があるのに、なぜそこだけで学びが完結せずに、塾などに頼らなければいけなくなっているのか。これは違憲ではないのかとたまに思います。あとは、良い学校とはどんな学校でしょうか。良い学びとはどんな学びか。人生についてじっくり考える時間、誰からも評価されずに、自由に考え、実践できる時間は、100年生きる中で何度かのタイミングで必ず必要なんじゃないかといこと。それから、今の日本の教育の仕組みで嬉しい人は誰でしょう。苦しい人はいっぱい知っているけど、誰が嬉しいのでしょうか。3歳児神話というのがありますが、それが本当だったら、デンマークは今ひどい国になっていると思います。1年で皆さん仕事に復帰します。あと、生きるという意味と自分

が生まれてきた意味。何で私たちは、ここに生を受けて、何をここでやろうとしているのかということ。それから、日本とか二宮、国民の人、町民にとって、世界にとってどんな国、地域でありたいのか。日本、それから二宮でしかできない役割って何なのかということ。それから、なぜ先生も学生も日本人もこんなに忙しいのだろうか。人生を皆さん楽しんでいますか。先ほども言いましたけども、自尊心は、自分の価値に対する子ども自身の認識に関するもので、自信は自分の能力に対する自信。人から評価されたときに感じられるものです。例えば、絵が上手な子が、お父さんやお母さんなどに絵が上手ねって言ってもらった時だけ、自分は絵が上手なのだなって思えるのだったら、それは不十分です。ちゃんとその子は自信だけじゃなくて自尊心を持っているかっていうのも見てあげて欲しいなと思います。これはデンマークの教育で必ず言われていることです。あと民主主義を育てていけないといけないということ。日本の民主主義は勝ち取ったものではないけれど、この言い訳をもう 77 年も言い続けています。やはりそろそろ日本にあった民主主義を創る時だと思えますし、自分たちに合った、自分たちで責任を持って全うできる民主主義を創っていけないと思っています。民主主義は正解も完成形もない。これは教育と同じです。それから全員が決定者であると。いろいろな人の意見を吸い上げつつ、自分にとってのベストは選べないけれども、みんなにとってのセカンドベストを選べるかもしれないところが、民主主義の良いところなので、どうやって最善の妥協点を見つけられるかにトライしていくことが大事だと思います。まとめると、デンマークの考え方は、どんな国でありたくて、やりたいことが割とはっきりしています。時代、時代で話し合ってきています。ですから今だと、やっぱり持続可能性をリードしていくことを世界に示していく国でありたいとか。それから自立性、多様性、柔軟性で、争わずに平和にやりたいというところがあって、そのために何が必要だろうかというのを洗い出します。それが、例えば教養、発想力、俯瞰力、対話力、交渉力、実現力、それを支えるための例えば食料、エネルギー、水、空気は自給できないといけない。それができると、他の国に自分たちが希望しない形で、依存しなくて済む。そういったことで自分たちの意見が言いやすくなるというところを非常に考えています。それを教育で実践していこうという形になっています。では、日本はどんな国でやりたいのだろうか。多分、今ははっきり見えないのではないかと思います。70 年代ぐらいまでは、戦後からの脱却、欧米に追いつけ追い越せというのがあり、実際に 80 年代に叶えました。でもそこからは、この豊かになった日本は世界の中で、どういう立ち位置にあればいいのか、話し合いがあんまり進んでこなかったような気がします。どんどんその個人主義に散っていったので、教育で実践することも、非常に個人主義に関わるようなやり方になっていったんじゃないかと思います。どんな国でやりたいかという議論が進まなかったことが、失われた 30 年に繋がる結果になったのではないかと私は感じています。ですから今、日本は世界情勢が変わってきている中で、どんな国でありたいのか、あるべきなのか、その中で、それぞれの自治体は何ができるのかということを考える時代に来ていると思います。長くなりました。ありがとうございました。

会 長 : 本当に興味深いお話をありがとうございました。では、続けて渡邊さん、よろし

くお願いいたします。

②渡邊 恒文氏

講演「世界の教育事情」

渡邊氏：実は、私自身はこのお題をいただきましたが、申し訳ないですが、教育については、あまり専門ではないっていうところを初めにお断りをさせていただきます。

今回の資料は、かなり広域にインターネットとか調べて、主にOECDのトップのところをベースにしています。資料の中は、できるだけ客観的なものにしていきますけど、間に、私の主観的な話を入れさせていただければと思います。

海外の学校と日本の学校の違いについて。一緒に働くフィンランドの人に話を聞いたら、フィンランドは、小学生の頃にオランダ語ではなく、スウェーデン語を学ぶとのことでした。何故かという、フィンランドだけ言葉がちょっと違うので、スウェーデン語を学ぶと、他の3か国語が何となくわかるからと。当然ながら英語も話すので、基本的に、3か国語は話すような社会だろうなと思いました。それから、オランダは、有名なイェナプランのところですよ。それからイギリスは、ホームスクーリングというシステムがあるというのは、面白いなと思いました。アメリカ、カナダ、イギリスもそうですけども、国の成り立ちに関係していると思いますが、国全体というよりも、ある一定の地域で教育の制度が違い、イギリスが四つの地域に分かれていたり、アメリカの州で違ってたりするはわかるなと思いました。それから、アジア圏内の中国は、ご存知のピサというものにフォーカスしており、個人的な意見になりますが、これは多分、一部の優秀な人だけだと思います。ここに書いてあるように、農村地域は、お金がないので、必ずしも統一的な制度をとっていないのだらうと思います。それからシンガポールは、ストーリーミング制をとっているというところですね。韓国はかなりの学歴社会です。私がつき合っている韓国の人たちは、おそらく、国の中では、上位の人たちだと思うので、基本的に、韓国のソウル大学やアメリカの大学を出ていて、ちょっと人種が違うのだらうと思っています。それからニュージーランドは、義務教育は有料だけれども、学校運営自体が独立採算制というような、面白い仕組みがあると思います。オーストラリアは市ごとに違う感じになります。

今日は、私の経験上を踏まえて、言語教育とIT、学校教育の3つについて話をさせていただきたいと思います。

まず、言語教育。最初に、世界では当然ながら英語が一番話されています。これ以外に、スペイン語、フランス語、ポルトガル語が結構多いです。これは何かというと、ご存知のように植民地です。べつに多いのが中国語、それから、ヒンディー語、ベルガル語、ウルル語。中国とインドは現地の人が多く、そこで働いている人が多いので、多く話されています。スペイン語、フランス語、ポルトガル語、それと人口が多いところというような印象を持っています。英語圏については、実は、アメリカの英語とイギリスの英語は違います。例えば、アメリカで出口というところをexitと言いますが、イギリスやオーストラリアではway-outと言うので、困惑する

感じになります。生活する場合にもちょっとした違いはあります。だから、私たちは英語の勉強はするけれども、いろいろな国で、それぞれ違う英語を話しているので、日本人英語があっても良いのではないかぐらいで学ぶのが良いと思いました。それからスペイン語は、ご存知のように、スペインの人ってほとんどいなくて、中南米、南米はブラジル以外がスペイン語で、アメリカの南もかなりの確率で、移民にスペイン語の人が多いです。アメリカに行ってもスペイン語のテレビが多いです。ポルトガル語とスペイン語とかなり似ているので、ブラジル人は、スペイン語も話せる確率が高かったりします。何か方言のような感じですので、その言葉のファミリーが似ていると、学習し易いっていうのはあると思いました。それからフランス語を話す人は少ないと思っていたら、植民地が多かったので、アフリカなどでは、フランス語は通じるところが多いようです。

英語の必須項目ですが、日本は5年生からですが、それ以外の国、例えば中国とかスウェーデンでは、もっと低学年から必須になっているのが、すごく面白いところですね。それから英語がどのくらい話せるかというところですが、アジアの中では、マカオとか中国はありますが、先進国の中では最低ラインです。それからヨーロッパについても、かなり高い確率で英語が話せます。あと、2014年から2017年の3年間で、英語がどのくらい習熟されたかというグラフでは、日本は下がっています。全般的に、世界中でやっぱり英語が重要だという認識があって、全体的にレベルアップをしている中で、日本が下がっているというのは、やっぱり悲しいと思います。それから、中東あたりも英語の重要度が増えてきているので、そのレベルは上がってきているところだと思います。また、平均年収のデータについては、かつて日本人は、地球の中で1番給料が高いところと言われていた時期がありましたけれど、その後、中国やインドに仕事を取られてしまい、現在の日本の給与レベルは、かなり下がっています。昨年ぐらいのデータだと思うけれども、実際は、円安の影響で、その価値はもっと下がっています。オランダに10年ぐらい前に行った時、外食が高くて無理だと思った覚えがあります。何でこの年収の話をしているかという、外国の言葉を学ぶというのは、海外に行って儲ける、いわゆる出稼ぎです。そういうのができるというのが一つのモチベーションだと思う。例えば、割と有名なのはフィリピンで、フィリピン自体で生活ができないので、人を外に出して、そこから外貨を稼ぐというような生活をしています。最近だと、中東のリッチなところ、サウジアラビアやカタールが多いです。基本的に、海外の国際空港に行くと、かなりの確率でフィリピン人がお店にいるような感じですね。英語を学んで、海外に行って、お金を稼ぐみたいな、何かそういうモチベーションがあると、英語の学習能力が高くなると思います。日本人は、海外に行かなくても生活できるので、モチベーションを下げる話かもしれません。海外の人と話しをすると、大学以上の教育において、母国語で学べるという国は、ほとんどないです。例えば、バングラディシュの人と話しをしたら、高校は英語の授業が選択で、大学以上は必ず英語ということです。中国では、今は、中国語で学ぶことが多いですけども、10年、20年前は、英語で勉強していたと言っています。日本は、すごく良い国なの

で、大学行っても日本語で勉強ができるっていうことが、今はちょっと残念だと思います。本当に英語でないと学べない国が多いので、それで英語を学習しようというところがあると思います。一方で、母国語で勉強するためには、翻訳の処理が必要です。私も翻訳の仕事をやっていたけれども、大体、本を出版するのに、半年から1年ぐらいかかるので、情報としては、2年前ぐらいのものが日本語になってきます。今は、インターネットの時代ですので、世界中の最新の情報は、英語じゃないと駄目です。例えば私のやっているAIなどの情報はインターネット上では英語が最新のものなので、研究者は、英語で学習ができることが必要です。それから、いろいろ勉強の方法があり、授業だけではなく、YouTubeとか、インターネット動画でどんどん情報が出てきます。その情報とか教材は英語なので、英語が分かるとすごく学習できます。ちなみに、日本語の情報は2、3%ぐらいです。英語の学習のモチベーションは、昔はコミュニケーションでしたが情報をインターネットで読み取れる、聞き取れることが必要になり、また聞き取れるためには、話せないといけないので、そういったところで世の中が大分変わってきていると思っています。誰かが、今、日本は世界の情報から鎖国状態になっていると言っていましたけれど、英語ができないから鎖国状態になっていることは、すごく真剣に考えないといけないと思います。

それが次のところでも同じ話ですけれども、ICT教育について、十分なICTスキルがあるというのは良い点ですけども、最低限のITCスキル、対応能力が不足している層が、他の国と比べてかなり多いです。だから一部の人は良いのかもしれないけれど、大半が、ICTスキルがないという状況は、かなり問題です。ICTスキルというのは、仕事の効率化とか仕事のやり方というだけではなく、英語に関する情報の取得とか、外の情報の取得にも影響がしているのだと思います。それが、顕著に表れているのが、家庭でのICTの使用頻度で、レベルを5段階とすると、日本は1.5で、ほとんど使ってない状況です。アメリカの大体半分、先進国の半分ぐらいしかありません。私は、セキュリティとかネットワークも専門ですけど、日本人の生活の中でよく言われているのが、安心とか安全です。例えば、海外では道路の工事現場には安全管理者は立ってないです。日本では、工事をする側が責任があるとの考えから、安全管理者が1人とか2人は立っています。おそらく海外は自己責任との考え方があり、かなり違うのかなと思います。だからICTも、インターネットにアクセスするうえで、いろんな危険性があるので使ったら良くないというような考えがある。そのベースが違うような気がします。そこはしっかりとどうすれば安全か、こういう危険があるのかということを教えて、どんどんアクセスする方が良いと思う。それは、マイナンバーカードも同じで、いろいろな危険があると思いますけれども、カードがないから、いろいろな情報が使われていないということだと思います。先日、10月にカタールに行った際入国の際でワクチン接種の証明をアプリケーションで提示しなければなりません。入国する際は、スマホがないと駄目です。また入国だけでなく、電車やレストランなどでもチェックを受けます。さらに最近、多くの国で、お店に入ってレストランで注文する際には、

基本的には、テーブルの上にQRコードを読み取って対応します。日本は、スマホを持っていることが前提じゃないので、持っていない人のためにも必ずメニューがあります。中国の最近の経済的發展では、全員を救うのではなくて、一部の人の生活レベルが上げるといような考え方ですが、決して悪い話ではないと思います。国の發展をどこに持っていか、私たちはどこを目指すのか、その辺の議論がされていないところが、問題になるのだらうと思っています。日本はたまたま10年、20年前は、そういったことがなくても良い水準だったのですけれど、今、世の中は全然違っていて、給与的にも技術的にかなり下がっているの、何をめざすかという議論が必要になってくると思います。

3番目のテーマの学校教育について、6つの話をしたいと思います。義務教育の期間が長いから良いとか、短いから悪いという話でもないと思います。添付した資料は、發展途上国を中心にまとめている情報なので、OECDに入っている国はないですが、国によって随分違うなということがわかります。

それから、学校教育自体のいろいろ資料を見たときに、幼稚園を就学前教育などと言っていたり、中学校も二つぐらいに分かれていたり、高校も一般教育と職業の専門教育に分かれていたりなど、日本の教育制度とは違っていて、特徴が出てくる。あと日本の大学だと、いろいろなコースがあるものの、どちらかというところと一般教育によっていると思います。海外だともっと職業に結びつくようなところが多くなってくると思います。私は、日本の大学はコンピューターサイエンスでしたけれど、アメリカの大学はプロジェクトマネジメントでした。プロジェクトマネジメントのコースは即仕事に行かせるような考え方で内容が全然違い、学びも教わるというよりも、自分たちの経験をフィードバックしながら考えていくことが、多いような感じがします。

次に、韓国は例外で、彼らには兵役があるので、何かそういう違いはあったりはするのだらうと思います。最終学歴ということ言うと、おそらく日本は、学歴としては高いところだと思えます。ただ、他の国を見ると、どちらかというところと普通科目よりも、職業的な過程に特化しているところが、全然違うのだらうと思います。だから、日本が一般教育にすごくシフトしてきている感じはします。ちなみに、大学院の話をする、国のプロジェクトで、AI関係のスキルアップのために、大学院生をアメリカの大学と交流させるプログラムをやろうとしました。残念ながら、コロナの関係で実施できなかったですけど、驚いたのは、手を挙げた日本人の割合がすごく少なく、ほとんど外国人でした。国を挙げてやろうと言った時に、すごく残念だったと思いました。最終学歴に関してですが、日本は進学率が上がっています。これは、決してすごいことではなくて、ご存知のように、大学の数と、学生の数を考えると、学生の数がだんだん減ってきているので、全入学時代に入っていることを示していると思います。それに対して、他の国は違う意味だと私は思っていて、これはデータとしては、良いですけど、その意味を考えないといけないのだらうということだと思えます。これが進学率の違いということなんです。中国は、進学率が高いですけども、人口が多いので、進学していく人は一部です。

ただ彼らは、国内だけでなく、アメリカとかで、いろいろなことを学んできているので、力としてやっぱり強いだろうなと思いました。あと、15歳から29歳で勉強しているか、働いているかというところですけど、日本は高学歴になっていることもあって、かなりの確率で勉強をさせてもらっている状況だと思います。国によってはそうではないことが、一般的だと思います。働いていない人の中で、就職活動を諦めた人とか、完全に失業中という人がどのくらいあるというようなデータですけども、メキシコとかトルコとかブラジルとか、イスラエルはちょっと違うけれども、日本が、チリのような南米の国に似たような状況というのは、ちょっと悲しいことだと思います。正規雇用ではない人がやっぱり多いというのは、この30年間で起こっていることだと思います。また、全然違うデータですけども、3歳のときに、エデュケーションを受けているかどうかというデータですけども、デンマークとか、フランスでかなり高いレベルですけど、日本は80%ぐらいというデータになっています。それから、これに違うデータですが、女性の方が何歳で一番初めのお子さんを産んでいるかというものです。どの国も伸びてきている感じです。また、このデータだけでなく、産んだ後、どのくらいで仕事に復帰できるかというところが、データとしては重要だろうなと思います。それから教育の効果に関連するアンケートの結果ですけども、高学歴になればなるほど、健康状態が良好であるとか、健康状態といっても、精神的な部分も含めたことだと思います。それから、月1回ボランティア活動をやった割合、自分は政府に対して発言権があると思うとか、或いは、他人を信頼できますかについて、いずれも高学歴になればなるほどこういった値が大きいので、教育の効果はあるのだろうというようなデータになっています。ちなみに日本は、いずれにしても、データの値としてはそんな高くはありません。ただこれは、日本人は、5段階のアンケートをとると、とっても良いとは絶対につけず、真ん中程度にする傾向にあるため、データをそのまま受け取れないことはわかっています。それから、学校に対するお金の払い方ですけども、日本の学校の在籍の割合としては、割と私立に行っているのだろうと思いました。一方で、実は大学に対してはかなり支払っているけれども、私立の小学校、中学校、高校に対しては、政府はそんなに払ってないということが言えます。これも同じようなデータですけども、年間の授業料は、GDPをベースにアジャストしているデータで、大学、国公立大学の授業料は、かなりの高い水準にあるって言うことが言えます。海外の面白い例としては、ドイツは留学生において大学が無償です。ですので、ヨーロッパにいる友達に言わせると、ヨーロッパにいと、大学がドイツに行って無償で、働くのは企業の一番いいところで働くみたいで、いろいろな国を変えて仕事をしている人がかなりいます。言語もそうですし、働く人のモチベーションもそうですし、そういったところに違いが出てくるであろうと思いました。選択肢はかなりあるので、面白いなと思いました。

ここから、先生が興味のある話だと思いますが、学級の規模、1クラス当たりどのくらいの人数かということですけど、日本は2000年、2012年とちょっと古いデータですが、28名となっていて、減ってはいます。ちなみに私立は入っていないで

す。OECDの平均だと、20人ちょっとです。二宮の場合は、子どもの数が減ってきているので、こういった状況ではないというのはわかっていますが、まだ多いような感じです。それから、小学校と中学校を比べましたけれども、小学校の方が、中学校よりは人数が少ないというような傾向にあるようです。それから次、これは私立と公立学校の学級規模ですけれども、私立の方が、若干、詰め込んでいるような状況です。どちらにしても、OECDの平均よりは高いということが、読み取れると思います。それから面白いのは、児童生徒と教職員の比率を比較していますが、けれども、高校は、教職員の方が多くて、生徒の数が少ない。小学校は児童の数が、ちょっと多いような感じです。それから、データの中で面白いと思ったのが、これはアンケートに基づいて、出しているものですが、教室の規模と仕事の満足度というアンケートをとっているものですが、26人から30人ぐらいだと満足度がちょっと高く、36人を超えると満足度が下がる。それから、一定のクラス内に問題行動のあるような子どもたちが、割合についてのデータですけれども、やっぱり、多ければ多いほど、満足度はかなり減るというデータがあります。それから、授業時間の話ですが、文科省で決められていると思いますけれども、日本は年間の授業数がかなり多いというデータになっています。科目別、授業時間っていうのも細かく見ていただくと面白いと思っていますけれども、小学校の場合、日本は、読み書き国語っていうのが、それほど高くないです。数学とか算数に関してもまあまあという感じです。国によって特徴があるのかもしれないですけれども、この辺の割合というのが国の方針で、大きく出てくるところと思ったのと、それから、日本のこの考え方は、いわゆる読み書きとか、それから数学、自然科学、外国語というような感じが大半で、それ以外の選択肢がほとんどない。いろいろ、他の国と違うというのを見ていただければ、面白いと思います。今、大学はどうなっているかという、従来の何とか学ではなく、その狭間の学問がやっぱり必要だということ、特に東京大学は文系理系関係なく、新しい課題に対して、どうやって解いていくのかというようなことをやっています。だから、新しい技術とか新しいものと言った時に、まぜるといような学術的な間というのが本当は重要で、掛け合わせというところで力を発揮できるという人材が必要だろうと思います。日本人はなかなか難しいところだと思います。先ほども言いましたけど、目先の簡単な課題を、従来の手続きで解決することは、すごく得意です。でも、そうではなく、それできなかった時に、イノベーションとか新しいシステムを入れるとか、体系化するところがすごく弱い。何やっても思います。その教育の基本的な決め事について、いろいろ話をするとか、新しいアイデアを出すとかというようなことが必要だろうと思います。中学校の授業時間については、そんなに高くないというのは、ちょっと面白い傾向だと思いました。それから、小学校、中学校、高校でどのくらいの時間数を費やしているかというところで、国によってかなり違うなというところで、面白いです。ノルウェーとかアイスランドは、幼稚園のところで、かなり手厚く見ているというのは、いろいろな意味で面白いなと思いました。それから次は、中学校に限ってのデータしかないけれども、授業時間をどういった形で使っ

ているかっていうデータです。日本は授業にかける時間が、平均よりはちょっと少ないという感じに見えます。今の話が教員制度の話に繋がりますけれども、勤務時間の中で、純粋に授業に費やす時間はどのくらいかを見た時に、面白いのはいろいろな国が、かなりの確率で、授業に費やすことができますが、日本はそれ以外の時間がかかなり多いというところが特徴的だと思いました。授業に費やす平均時間は大体1週間で19時間で、日本は総就労時間54時間のうち18時間です。それから課外授業というのが、先生の時間を取っているというところがあります。OECDの考え方では、基本的には法規制とか或いは、ステークホルダーと言われているような協定に基づいて、仕事をするのですが、ブラジルから始まってスロベニアのところは、基本的には学校レベルで決定しています。それから、課外授業の時間制限がないけれども、必ず、課外授業やってくださいというものがある。ベルギーに関しては、例えば授業の準備やテストの修正やレポートの採点に関しての時間の規定はないけれども、それ以外の時間を学校で決められている。イタリアは、年間80時間と決められていて、その内、最大40時間を会議や計画や保護者との会議に使って、それ以外は、クラス評議会に使いなさいと規定されています。課外授業を調べると、学校の休暇中ではなく、授業の前とか後に行うというのが一般的です。今は、学校の自主性に任せられていることが多いですけれども、フランスとかポーランドは、小中学校では必ずやりなさいと言われていて、ハンガリーは、午後4時までには、やらないといけないと決まっています。国によって主体はそれぞれで、学校とか自治体とか、或いはボランティアとか保護者会とかNGOとかがやるというようなこともあるみたいです。基本的に半数の国で、課外活動に関する教師に対しては追加料金を出しているということ。それから、学童もありますけれど、家庭教師とかスポーツとか、芸術文化活動をやっているというところで、ハンガリーとかトルコは、社会奉仕活動も入っていたり、スペインは外国語とかICTとか、読み書きっていうところにも、課外授業があるというような感じです。二宮でもこういった部活の活動で、外からの人を参画させるというような制度を入れました。だから、この辺も参考になるのかなと思います。最後に、教員になる条件について紹介します。基本的に教員になるためには、日本では、幼稚園から高校すべてに対して、前提資格とか或いは、追加の要件がありますが、国によってはこれが全くないとか、或いは基本的に始めるときには必要だけでも、それ以外の追加要件がないというところがあったりして、この辺は随分考え方がいろいろだと思います。それから、これはすごく面白いと思いましたけれども、中学校の教員の、職歴については、同じ学校で何年間働くかという日本の場合同じ学校で5年ぐらいですが、他の国が10年、15年と同じ学校で教育の経験をとるというところが、かなり違って興味深いところでした。

お話をさせていただきました細かいデータは、公開されているデータですので、興味があったら見てください。以上です。ありがとうございました。

会長 ありがとうございました。本当にいろいろなデータで、私もどう読み解いたらいいのかということに時間をかけて、これから見ていきたいと思いますが、大変参考

になる資料をいただきました。ありがとうございました。それでは本当に短時間しか取れませんが、どうしても今ここで聞いておきたい、お尋ねしたいというところがあれば、2人の講師の先生どちらについても結構ですので、挙手をお願いしたいと思います。

会 員 北村さんに卒業試験の中身をお聞きしたい。

北村氏 大体フォルケホイスコーレ、日本で言う、中学3年生と、それから高校3年生の卒業試験は、どちらも日本の大学卒業論文のような形です。特に高校とかになると、卒業試験の論文を書くためのテーマを決め計画を立てて、担当教員の許可をもらわないといけないというような感じです。例えばうちの息子は、音楽と英語を選択しましたがけれど、英語だったら、英語の教育が若者世代とかに及ぼす影響の違いを論文に書いて、それを口頭でも発表する。それに対して、いつも教えてもらっている先生以外に、外部の第三者も含め、質問や評価をされます。中学や高校でも、数学とかに関しても、計算する試験のほかに、口頭試験が必ずあって、例えば社会的な課題みたいのが出て、今まで習ったことをうまく使って、答えが導き出せないかどうか考えてそれを説明するような試験であったり、気候変動の授業も非常に力を入れているので、実際にその気候変動が進んでいるデータを見せて、ここから読み取れることは何か、これからやるべきことは何かをグループで話し合って発表するような形の試験です。

会 員 デンマークの幸せ第1主義で、しっかりその国の方針として、教育の方針として礎にあるのが良いと思います。自分の職業選びも自分が幸せになれる職業を選んでいこうというスタイルだと思います。先生がご覧になって、若者たちで教員になるというのは、魅力的な仕事になっているのでしょうか。今、日本の状態では、私は決してそうではないと思います。そこがとても残念だと感じています。

北村氏 うちの息子は、義務教育の教員になりたいと言っています。今、ギャップイヤーを今年と来年2年とりますけれど、そのあとは、教員養成大学に入ると言っているので、教師は魅力的な仕事に映ったのだと思います。ただ、エフタスコーレの教員がとてももっと楽しそうだったから、できたらそっちに進みたいと言っています。一般的にも、子どもとともに学びを作っていくみたいな環境に魅力を感じている人が多いと思います。あと教員ではないですけど、最近は、農業が格好いい職業になってきているっていう特徴も出てきていると思います。やっぱり気候変動の問題に正面から立ち向かって、かなり多くの知識を持っていないとできない職業なので、その気候変動だけでなく、地域経済、EUの経済、国際経済もわかっていて、なおかつ、ICTの技術も最先端を知らないといけないということで、農業という職業が非常に魅力的に写っているっていうのも近年の変化です。

会 長 お二人の先生のお話で、国としてとか地域として、教育に求めるものは、何なのかというところが非常に興味深く、それぞれの国のデータやデンマークの話から、お聞きすることができました。ありがとうございました。

(2) 第2回ワーキング結果のふりかえり

会 長 第2回の協議の中で、皆さんにどんな子ども像を育てたいかご意見をいただきました。そちらの資料が、今日の資料3-1です。ここに各グループから出された言葉をまとめてみました。心・自己確立に関わるところ、学力学習に関わるところ、学ぶ意欲・キャリア意識、社会性・他者との協働、ですとか、地域協働というような、大体この5つの分類をしてみて、皆さんの言葉をそこに入れ込んでみましたので、ゆっくりご覧いただきたいと思います。資料3-2では、皆さまから出されたいろいろな子ども像を、どのように小中一貫教育を目指す子ども像として押さえていくのかをまとめてみました。やはり私も、学校教育に関わっていて、目指す子ども像を学校教育目標で考えたことも多々ありましたが、今回、地域の皆さま、保護者の皆さまのお声も入れたことで、随分膨らんだと実感しました。こうして、地域の皆さま、保護者の皆さま、いろいろな視点から、子どもたちの教育をとらえていくことは本当に大事だし、中身が厚くなるということを感じています。資料3-②です。9年間で目指す子ども像と実現のための小中一貫した義務教育内容。ここでは子ども像に留めないで、今やっていること、今後考えられることなども含めてまとめてみました。Bグループの話し合いの中で、やはり目指す子ども像を考えたときに、そこには保護者の働きですとか、それから考え方・あり方、それから地域の考え方・あり方が非常に大きく関わるという声がたくさんありました。学校、家庭、地域の役割ということも書いてみました。資料3-②では4つに分類をしています。先ほどの学力・学習と、学ぶ意欲、キャリア意識を一緒にしてみました。ここでお示しするのはあくまでも案です。私たちが何人かで話し合いをして、最終的に会長として、まとめさせていただきましても、少し違うところなどがあれば、また、第4回以降でご意見をいただきたいと思います。

まず、自尊感情に関わる部分です。自分の良さを理解し、生かしていこうとする意欲と実践力を持った子になります。その補足説明は次の3つで、自他の良さを理解し命を大切にすること。それから、自信をもって自分の良さを生かし新しいことに挑戦すること。それから、自他の特徴を知り互いに補い合って課題を解決できること。人間1人では生きていけず、誰しも弱み強みがある。でも、補うことで、いろんな課題を解決できるのではないかとということで、その実現のために必要になることを考えてみました。まず、教師、地域、家庭すべて含めて、大人は子供の権利を尊重すること。それから子どもの声にしっかり耳を傾ける。これがないと自尊感情は育たないだろうという考え方です。学校教育は今すでにやっていることです。

次に二つ目ですけれども、社会で通用する基礎学力、読解力、語学（英語）力を身に着けた子です。細かく言いますと、自ら学習課題を持ち意欲的に学ぶ子となり、与えられたものにとどまらず、自ら課題そのものを自分の力で発見し解決できる、そういう力が欲しいということです。それから必要な学力を身につけ、義務教育終了後の目標が持てる子。社会生活に必要な読解力、語学力を身に付けた子。学校教育では何をしたらそれが実現できるか、或いは家庭、地域ではどうかということです。

次に三つ目です。多様な個性や特徴を理解し、協働して前に進む子。やはり皆さんの中から、人と自分の違いを知ろうとか、それから人の良さを知ろうとか、お互いに協力しあうという言葉がたくさん出てきました。これは、自他の違いを知ることによって多様性があるということを知り、そのうえで協働して、課題解決を目指すということです。それから、自他の弱みや強みを理解し、補い合いながら社会生活を送れる子。先ほども出てきましたが、ここでも同じような意見が出てきています。それから、豊かな対話や他者との関わりを通じて社会性を高める子。コミュニケーション能力を挙げているグループもいくつかありまして、それを対話という言葉で表しました。特にこの部分について、保護者（大人）の役割が大きいというような意見がたくさん出ており、例えば実現のためには、家庭・地域では、子どもと一緒に社会事象に目を向ける機会を持つ、それから、子どもとの協働活動を充実させるというようなことを挙げました。

四つ目です。郷土への愛着や誇りを持ち、広い視野に立てる子。補足説明としては3つ挙げました。二宮町を愛し郷土ではぐくまれた心や知恵を広い世界で活かす子。二宮を地域学習で学ぶわけですが、それを二宮の中にとどめないで、広く社会で活用していこうということです。そして郷土ではぐくまれるのは、心です。私たちの心を豊かにすることにもつながりますので、心や知恵を広い世界で生かすということにしました。それから世界に目を向け、自国や郷土を理解する子。もう一つは地域、社会の発展に向けて、できることから行動する子。そして学校教育、家庭、地域でできること資料のとおりまとめました。

本日は時間があまりありませんので、またゆっくりご覧いただいて、この4つの姿で良いのかどうかをご検討いただければと思います。

今後、これをどのように提言書にまとめるかですが、この子ども像と、そして、それらを実現させるための学校、家庭、地域の役割を別立てにしようかどうか考え中です。

それから資料の最後に推進計画のグランドデザインを添付しています。ここに書かれた願いというのが、二宮町の先生方の願いを書いたもので、特に学校ですから、教科学習を通して育てたい力ということで、教科に特化しています。ですので、これはこれとして、学校教育の中で行う、育てる力、育てたい子ども像ということでご理解いただきたいと思います。このグランドデザインの目指す子ども像と、先ほどお示した1から4の目指す子ども像を総合的に考えて、今後、どういう教育内容がいいのか、どういう学校が良いのかということを考えるベースにしていきたいと思っています。以上です。何かご質問ありますでしょうか。

会 員 子ども像の2つ目の社会で通用する基礎学力、語学力、語学（英語）力を身に着ける子について、読解力とか読み込む力だけではなくて、発言する力が必要だと思います。おそらく子ども像の3つ目の「対話」で、考えを伝えることを指しているのだと思いますけれども、私としては、この2つ目の基本的なところで、伝える力を入れていただけると、基礎的なところが膨らむのではないかと思います。日本人は、意見を言わない。イノベーションを起こしたり、新しいことをやるために、自

分の考えをまとめて伝える力が必要だと思います。

会 長 ありがとうございます。要するに自ら考えてそれを発信する資質力ということですね。他にいかがですか。確かに、デンマークの話、それから諸外国の話聞いていて、自分の殻を破って、外に出ていこうとする意欲ですとか、それを伝える力がないとなかなか世界の中で幸せな生活というのは難しいということを感じました。本当にごく小さなエリアでずっといるのであれば、それはそれで良いけれども、そうでない子どもたちにとっては、必要な力だと思います。入れていきたいと思いません。

北村氏 今、海外から見ていると、日本は何をやりたい国かがはっきり見えないです。何を考えているのかもわからない。だから、伝える力となぜそれを伝えたいと思っているのかを根気よく説得できる能力というのはすごく大事だと思っていて、ここに書いてあることは、実際に何かやりたいことの手段だと思います。最終的に何をどうしたいのか、その子たちがどうなりたいたいのかで最終的な部分というのは、みんなが幸せに生きられることだと思うので、みんなが幸せに生きられることを、必ずどこかに置いておいて欲しいです。もちろん、その地域に根差して地域の中で生きていくのも、すごく素晴らしい生き方だと思いますけれども、これから日本も人口がどんどん減っていく中で、外とのコミュニケーションをなくしては成り立たない状況になっていくと思うので、本当に異文化と積極的に交流していけるための伝える力というのは、大事だと思います。

会 長 ありがとうございます。いろいろな幅広い意見をいただけますと、本当二宮の子どもたち、目指す子どもがどんどん素敵になってくると思います。

今後、皆さまからの意見を踏まえ最終形にまとめていきたいと思しますので、ご協力をよろしくお願ひしたいと思います。では、これで終了いたします。